

## 低標高地における周年親子放牧に適した牧草種の選定

○鳥羽菜摘・藤田和男

(大分県農林水産研究指導センター畜産研究部)

### 【目的】

近年、過疎化や高齢化による農業従事者の減少により、耕作放棄地や未利用地が増加している。そのような中、これらの土地を繁殖牛の放牧地として、周年親子放牧を行うことで、低労力、低コストな経営がおこなわれることが期待されている。

そこで、本研究では、広く周年親子放牧を普及させるために新たに低標高地に適した周年親子放牧適応草種を選定し、冬季飼料資源と組み合わせた低標高地における周年親子放牧飼養体系を確立する。本研究は、農研機構生研支援センター「革新的技術開発・緊急展開事業（うち人工知能未来農業創造プロジェクト）」の支援を受けて実施した。

### 【材料および方法】

供試草種 トールフェスク(以下,TF kyusyu15)  
イタリアンライグラス(以下,IR アキアオバ3)  
バヒアグラス  
矮性ネピアグラス  
エンバク(以下,0at K78R7)  
ライ麦(以下,Rye ライ太郎)  
イタリアンライグラス(以下,IR さちあおば)

栽培面積 6 m<sup>2</sup> (3m×2m) ~48 m<sup>2</sup>  
(12m×4m)

播種時期 寒地型牧草, 冬季飼料資源:  
9月播種  
暖地型牧草: 5月播種(移植)

施肥量 堆肥 3 t /10a  
基肥 N-P-K=5.0-5.0-5.0kg/10a  
追肥 N-P-K=2.5-2.5-2.5kg/10a

調査方法 毎月1回の刈り取り調査を実施。寒地型牧草は, 8~9月は刈り取り休止としている。

### 【結果および考察】

#### 試験1 永年生草種の選定

- ・TF: 3月~7月, 10月~11月にかけて安定した収量が得られ, 越夏性に優れていた。

- ・IR: 収量はTFとの差がなかったものの, 越夏できず, 永続性がなかった。
  - ・バヒアグラス: 5月~9月の夏季に安定した収量が得られ, 永続性に優れていた。
  - ・矮性ネピアグラス: 収量性は優れていたが, 利用できる期間が7月~9月と短く, また, 越冬性が劣っていた。
- このことから, 永続性に優れたTF及びバヒアグラスを選定した。

#### 試験2 冬季放牧用草種の選定

- ・0at: 10月~11月にかけては収量が得られるが, 耐雪性に劣っていた。
  - ・Rye: 10月~11月にかけて収量が得られ, 翌年3月にも十分な量の再生が確認された。
  - ・IR: 10月~11月の収量は麦類に劣るが, 翌年3月~5月までの収量が優れており, 冬季から初夏までの利用が可能であった。
- このことから, Rye及びIRを選定した。

試験1及び試験2からこれらの選定した草種で各牧草の利用時期に適正な面積で周年親子放牧が可能であると考えられた。